



## 馬耳東風

「小人間居して不善を為す」。このところ時間にまかせてあれこれ考えていると、頭に浮かんでくるのは彼方も此方も「拝金主義」に踊らされる姿ばかりである。政治の世界の混乱ぶりにはあきれが、何も政治に限った事でもないらしい。最近、世の中では「壇」の権威が崩壊したといわれる。学校にある教壇にも「壇」という字が使われているが、ここでは「社会における範囲」を表す「壇」の世界のことである。芸術の世界では芸術院という国の榮譽機関がある。芸術院会員には画壇、文壇それに楽壇などの優れた個人に非常勤の国家公務員として、終身会員の身分と年金が与えられている。しかし、最近では芸術院会員としての権威が低下してきたと新聞でも取上げられていた（昨年12月朝日新聞の特集「文化変調・ゆらく権威」）。その背景には、何処の世界でもあるように、全て「金」がものをいう制度になってしまったこととの指摘もある。

画壇でもこの作品が芸術院会員のものかと目を疑いたくなるようなものがある。欠員ができるとそのポストを狙い、新会員を選ぶ審査員（現会員）の買収合戦が加熱し、その金額は画壇では2億円とも3億円とも聞く。絵の実力とは関係なく選出された会員は、やはり絵の実力とは無関係に自分を引き立ててくれる者を選任する。この旧態依然とした体質のため、誰もが認める実力者の中には権威を失った芸術院には関心が無いという人もいるようだ。会員になれば作品の価格が一挙に3割以上上昇した時代にあっては会員という称号に魅力があったよう

だが、今では会員になっても価格はほとんど上昇しないと聞く。以前は日本の美術品市場では、絵の取引は作品の価格ではなく、作家の価格で売買されると言われていた。その時代には芸術院会員という称号は威力を発揮したが、それがインターネットあるいは公開オークションの普及に伴い、絵の価値に対する価格で売買されるという本来の姿に変わりつつあるのかも知れない。それならば歓迎である。

文壇でも同様の現象があるという。芸術院会員という称号のみでは本は売れない。今年も先般、芥川賞と直木賞の受賞者が決まった。最近では受賞作をほとんど読んだ事がない自分に賞について批評する資格はないが、従来から賞の地位低下が言われていた。作家は作品の善し悪しで評価される訳であるが、その評価基準は審査員の主観に任されている。これは美術、文芸、音楽など芸術の分野では、全て個人の基準で評価する以外に方法はないから仕方のないことである。以前は、種々な文学賞を受賞した作品は販売部数が伸びるという現象があったが、最近では、受賞作でも必ずしも販売部数は多くないという。それが「受賞作だから良い作品であろう」と本を購入した時代から、個人の評価で購入を決める時代になったということならば良いことである。しかし、受賞を含めメディアが大々的に宣伝する作品は「他人が読んでいるのならば自分も読まない」と時流から取り残される」という感覚で購入者が増え、さらに売り上げが伸びるといふ。周囲の流れに乗り遅れると不安に駆られると言ふ構図は、賞の権威失墜よりももっと大きな問題である。（青）